

博物館だより



No.81

平成25年1月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13

友の会文化講演会は

1月27日(日)

博物館友の会主催の文化講演

会を次のとおり開催いたします。

ぜひ、お集まりください！

■日時 1月27日(日)13時30分～

■場所 当館研修室

■講師 北九州市立大学教授

八百啓介氏

■演題 「砂糖の通った道

～菓子から見た社会史～」

■備考 友の会会員以外の方の

聴講は資料代300円が
必要です。

1月の歴史講座

【漢詩文講座】

1月5日(土) 9時30分～

【古文書講座】

1月12日(土) 14時00分～

【古典かな講座】

1月19日(土) 9時30分～

【金曜古文書講座】

1月25日(金) 10時00分～

【みやこ学講座】

1月26日(土) 10時00分～

臨時休館のご案内

館内整理および燻蒸作業実施のため、2月4日(月)～8日(金)の間、博物館は臨時休館致します。

臨時休館中、博物館及び文化財業務に関するご質問は、左記へお問い合わせください。

教育委員会生涯学習課

Tel 33-3114

みやこ町古墳フォーラム開催記念

「小学生歴史たんけん作文コンクール」「わたしの町の過去・現在・未来絵画コンクール」

最優秀作品紹介

作文コンクール最優秀賞

「三十二文字に込めた思い」

諫山小学校 六年 有馬 樹

「有馬山猪名の笹原風ふけば

いでそよ人を忘れやはする」
この歌は、百人一首の中で、ぼくの一番好きな歌です。ぼくの名字から始まる歌だからです。山からの風で笹の葉がそよよと音を立て、それと同じように、私の心も動かすと言っています。さらに、あなたのことを忘れたりすることはできません。このような内容の歌ですが、自然の景色をうたいながらも、人の心も表現しています。こんなすてきな歌が、遠い昔に読まれていたことが、不思議でなりません。

ぼくの百人一首との出会いは、四年生のころです。その時の担任の先生が百人一首を教えてくれ、歌を生懸命に暗記しました。みんなで遊んだ時の面白さは今でも忘れることはできません。その後、百人一首をすることはありませんでした。が、この夏、図書館で「ちはやふる」という百人一首を題材とした漫画を借りて読んでみました。すると、ますます百人一首の魅力にひかれ、もっともっと百人一首のことを知りたくなりました。

百人一首は今から約八百年前に、藤原定家が飛鳥時代から鎌倉時代までの百人の歌を集めた歌集です。定家の義理の父から、「別荘のふすまに

はるための歌を写して欲しい。」と、頼まれ選ばれた百の歌が、今の百人一首のもとになったといわれています。この一言がなかったら、百人一首が生まれなかったのかと考えると、わくわくしてきます。しかも、鎌倉時代といえは、武士の時代ですが、定家は、みやびな貴族の生活にずっとあこがれていたのでしょう。そんな百首を選んだ時の気持ちを想像するだけでも楽しくなっています。

たとえば、「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」という歌がありま。この歌を聞くと、作者が読んだその景色が目に見えてきます。これは秋の歌ですが、ほかに、四季の移り変わりを感ずる心が見事に表現された歌がたくさんあります。夏の夜の短さを歌にし、雲を人に例えるなど、今以上に自然を身近に感じ愛していたのではないのでしょうか。美しいものを素直に美しいと感じる心があるところがいいなと思います。

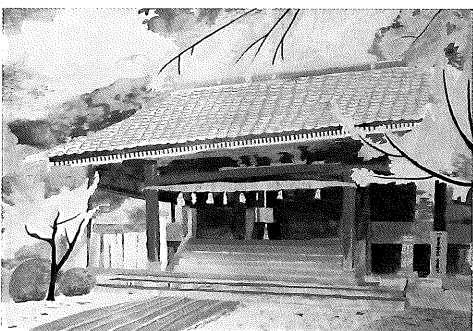
ところで、百人一首の中で、一番多い歌は、恋の歌です。男性と女性が直接出会って知り合うことのなかった時代に、歌で気持ちを伝えていたので、今は携帯電話やメールなどがありますが、たった三十二文字の中に、好きな人への気持ちを込めるなんて、和歌の奥深さを感じます。ぼくに

は、三十二文字に自分の気持ち表現するなんてできません。平安の人々の心を感じることもできるのが百人一首の魅力だと思っています。

そして、今、百人一首はカルタとなり、多くの人に楽しまれています。特に、競技かるたは、各地で競技会が行われています。ふすまに書かれて楽しまれていた和歌が、カルタとして楽しめるなんて、藤原定家は思いもしなかったことではないでしょうか。

「秋の日の黄金色の田にすずめ飛ぶがわが住む町は美夜古なりけり」これはぼくの百人一首をまねて作った歌ですが、百人一首は八百年近くも人々に愛され続けてきました。このみやこ町の美しい自然も百首の歌のように、千年先もずっと残っていつてほしいと願っています。

絵画コンクールグランプリ



諫山小学校6年 持永希実 「みやこ町の黒田神社」

みやこの歴史発見伝 61

古文書が語る村の生活と文化 11

村の名医たち 1

国分村医師・内田玄敬のこと①

国分村医師・内田玄敬

左に掲げた【史料1】は、嘉永六年（一八五三）に、仲津郡（現みやこ町・行橋市の一部）国分村（現

みやこ町国分）在住の医師・内田玄敬が、小倉藩に提出した、家伝薬「奇効丸」の販売許可願いです。玄敬の生年は未詳ですが、現在確

【史料1】

吉願口上覚

私家伝奇効丸、去ル亥年御郡中家別一貼宛施薬仕候処、功能宜御座候而其後望人多、余程諸人之為ニ相成候都合御座候得共、何分小医之義ニ施薬夫々行届不申、右ニ付、此度御郡中村々江少々宛施薬同様ニ売薬仕度奉願候、左候ハ、遠村之便理ニ罷成可申、何卒願之通被仰付被下置候者、難有奉存候、仍願書差上申候、以上

【解説文】

奉願口上覚

私家伝奇効丸、去ル亥年御郡中家別一貼宛施薬仕候処、功能宜御座候而其後望人多、余程諸人之為ニ相成候都合御座候得共、何分小医之義ニ施薬夫々行届不申、右ニ付、此度御郡中村々江少々宛施薬同様ニ売薬仕度奉願候、左候ハ、遠村之便理ニ罷成可申、何卒願之通被仰付被下置候者、難有奉存候、仍願書差上申候、以上

丑四月

内田玄敬

同村庄屋

平兵衛

（国作手永大庄屋

嘉永六年日記四月三日条）

認められているところで、嘉永元年（一八四八）七月に、「国作手永郡医頭取」（国作手永の医師たちを束ねる役職。国作手永は国分村のほか十四ヶ村で構成）に任命された史料が、玄敬の名前の初出です（国作手永大庄屋嘉永元年日記七月二十四日条）。

史料が少ないため、玄敬の父祖のことまで詳しく知ることは出来ませんが、その師匠は小倉の医師・西玄岱（代々小倉藩主の侍医などを勤めた西家の一族か）であり（国作手永大庄屋安政五年日記二月晦日条）、彼のもとで医学を学んだのち、郷里の国分村で家業の医家を継いだようです。

嘉永四年の施薬

【史料1】によれば、玄敬は「去ル亥年」（＝嘉永四年・一八五二）に、家伝薬の奇効丸を仲津郡内の家ごとに一貼（貼は薬を数える単位。「服」と同じ）ずつ施薬（無料配布）したところ、とても効能があつて、その後も望むものが多かったといえます。ただ、自身が「小医」であり、施薬では十分には行き届かないので、「施薬同様」、つまり、ごく安価で売り広めた、というのです。

他の史料で確認したところ、確かに内田玄敬は、嘉永四年に大量の施薬をしており、その数は郡内の三千九百三十一軒に対し、合計四千貼に及びました（国

【史料2】

奇効丸功能書

かくらん 食しよう
しやくき むねのいたみ
せんき ころの痛
一さいはらのいたみを治る事
神の如し
小児五かんのむし、色青く
はらのいたみに用てよし
禁忌差合なし
一、薬法之儀、御沙汰ニ御座候得共
家伝之義ニ御座候間、薬方書
差出候儀御用捨奉願候、以上
四月廿一日 国分村
内田玄敬
（国作手永大庄屋
嘉永六年日記四月二十一日条）

【解説文】

奇効丸功能書

本当ならばまさに神様のような妙薬です。藩からは、販売許可の願書（史料1）の添付書類として、効能書と禁忌（史料2前半）、それに薬方（調剤の方法）を添えるよう指示されましたが、家に伝わる秘密なので、薬方を添えるのだけは御用捨願いたい、というのでした（史料2後半）。ただ、藩の強い指示によるものか、結局は簡単な薬方書の後日提出しています（国作手永大庄屋嘉永六年日記四月二十五日条）。

作手永大庄屋嘉永四年日記七月十八日条）。

奇効丸の効能

では、その奇効丸なる家伝薬にどのような効能があつたのでしょうか。玄敬自身が書いた効能書が【史料2】です。

それによると、奇効丸は、霍乱（吐き気・下痢）、食傷（食あたり）、瘧疾（腹・胸の痙攣痛）、胸の痛み、疝氣（下腹部の腫れ・痛み）、腰の痛みに効果があり、「一さいはらのいたみを治る事神の如し」といい、子どものいわゆる「疳の虫」などにも効く、と謳っています。また、人体への悪影響などは無い、というのですから、これらが

最終的に、奇効丸の販売許可が下りたかどうか、現存の史料からは、今のところ確認できていません。一つづくー（川本英紀）